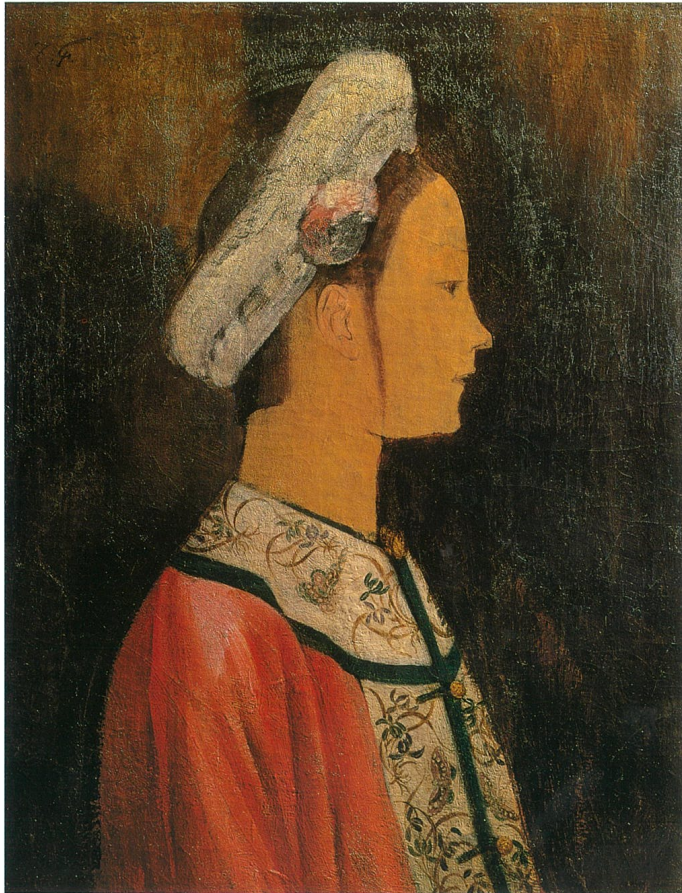


グリーンルーフ

鹿児島市立美術館だより

館藏品誌上ギャラリー⑤



藤島武二「鉸剪眉」1927年

鹿児島市立美術館

〒892-0853
鹿児島市城山町4-36
TEL. (099) 224-3400
FAX. (099) 224-3409



Kagoshima City Museum of Art

表紙の作品

「鉸剪眉」というタイトルについて作者は「かつて見た支那人形にあおした髪飾りがあって、鉸剪眉と題がついていた。何のことか知らない」と書いている。

藤島は、1926、7年に集中的に横顔の女性像を発表している。それは全画業のなかでも特に優れたものとして評価が高い。その制作のきっかけは次のように記されている。「イタリアの文芸復興時代には女の横顔の描写が多かった。ピエロ・デルラ・フランチェスカ、レオナルド・ダ・ヴィンチなどの絵を見た感じが、如何にも閑静な東洋的精神に交通しているので、ミラノの美術館の壁面に見飽かぬ凝視を続けていたものであった。」

藤島は他にも、ピサネロの女性プロフィールを模写している(P2参照)。ピサネロは中世からルネサンスへの過渡期に活躍した画家で、その名の通り斜塔で有名なピサに生まれ、流麗な国際ゴシック様式の絵画を残している。では、その画家がなぜ横顔を描かねばならなかったのか。

実はピサネロはメダル肖像画の大家であった。古代復興をめざしたルネサンス以降、ローマ皇帝の横顔の入ったメダルやコインのコレクションは大いにもてはやされた。メダルのモデルになりたいと思っていた王侯貴族たちの中で、ピサネロは羨望的であったらしい。

一般に、紙幣では正面像が描かれがちなのに対し、貨幣では側面像が取り上げられるのは、顔の量感の違いらしい。つまり陰影表現によって立体感を演出できる紙幣と違って、打刻という単純な技法でレリーフとして表現しなければならぬ貨幣は、より凹凸の少ない側面像の方がふさわしいようだ。そのような実際的理由から定着したやんことなき人物のプロフィールの伝統が、藤島の手によって蘇り、ためにモチーフの女性まで高貴に見えてくるから不思議である。

あるいは藤島の「東洋的精神」という言葉は、横顔の人物の量感の無さに東洋的な絵画表現に共通するものを感じ取ったせいかもしれない。